

第 17 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「猿の子」

東京都 香蘭女学校高等科一年 加藤 言美



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『猿の子』

東京都 香蘭女学校高等科一年 加藤 言美ことみ

「動物園から脱走した猿が学校の付近で目撃されたため、今日は集団下校となります。繰り返しします……」

騒がしい帰りの会の時間。途切れ途切れ聞こえる校内放送に、

きっとその猿が私のお父さんだ。

ただ、そう思った。

「ただいまー」

重いドアを勢いよく引っぱって、開いた隙間すきまにするりと入り込む。後ろ手にカギをしめて、手を使わずにクツを脱ぐ。同時進行でランドセルを玄関の隅に向かって放り投げた。投げたランドセルが玄関の角かどっこにぴったりはまったら成功だ。コートやらマフラーやらも走りながらぬいで、最後は和室にしいてあった布団にダイブ！

ドアから布団まで、早く行ければその日は良い日。私が決めたマイルールだ。ランドセルが少しズレた気がするけれど、あれはセーフだ。今日は良い日だ。

「春ちゃん、手は洗ったのー？」

やっぱり今日は悪い日だった。お母さんにアレを言われてしまったらアウトなのだ。

「今洗おうとしたのっー！」

「あらー、またそこらじゅうに脱皮してっ。春ちゃんは蝶にでもなるつもりなのかしら？」

ハンガーを持ったままのお母さんがベランダから出て来て、のんびりと私の脱ぎ散らかしたものを拾っていく。私はその横を走って行って、洗面所に



着いたら両手をさっと水でぬらしてびしゃびしゃの手のまま、もう一度布団に戻って二度目のダイブをした。

「うがいもしないとインフルエンザになってせつかくの冬休みどこにも行けないわよー?」

「どうせどこにも行かないじゃん」

私はそう言いながらかけ布団の山に顔を突っ込んだ。見なくても、お母さんがしまった、という顔をしているのが分かる。

お母さんはしばらく私のことを困ったように無言で見下ろしていたようだけれど、幼い弟の泣き声に、慌あわててベビーベッドの方へ行ってしまった。

昨日、またお父さんとケンカした。

いつものことだ。月に一回はして、一週間は口をきかない。

理由はいつもと同じ、お父さんが突然約束を破ったからだ。

スキーに行く約束をしていた昨日。朝の三時に起きて、バッグの中身を確認したり着がえたりしてからお父さんを起こしに行った。何度呼んでも起きないから、お父さんの肩をゆすったら、

「昨日は遅くまで仕事だったんだっ。スキーになんて行けるわけないだろう。こんな時間に起こすなっ」

と、怒鳴どなられてしまった。

結局お父さんは二度寝してスキーはなし。スキーに行こうって言い出したのは自分のくせに。けど、一番くやしかったのは、こうなるって知っていたのに自分が期待してたことだ。お父さんは私より仕事が大事で、お父さんは約束を破るもの。それで、私の一番嫌いなものは約束を破る人。

私はお父さんが大嫌いだ。

「お前はあの公園で拾ったんだ。あそこは猿が住んでいるからお前は猿の子だ。お前はうちの子なんかじゃない」

お父さんは怒るといつもそう言っていて、ベランダから見える小さな森のような公園を指さす。

そんなところも大嫌いだ。

「春ちゃん……パンケーキでも、焼こうか」



顔を上げると、いつの間にか弟を抱いたお母さんがまた見下ろすように立っていた。目が合うと、ね？ とお母さんは困ったように笑う。

お父さんは大嫌いだけど、優しいお母さんは大好きだ。

「うん……」

小さく返事してから布団に顔を押しつける。そうしていると、お母さんが頭をなでてくれた。

「お父さんはお仕事でえらくなったらばかりだから疲れてるの。ごめんね……」

お母さんが謝ることじゃないのに。お母さんを謝らせたかったんじゃないのに。

「うん……」

これ以上お母さんに困ったような顔をしてほしくなくて、私は立ち上がった。

お父さんは猿でも良いけど、お母さんは絶対、今のお母さんじゃなきゃ嫌だ。

その日の夜、私はトイレに行きたくなくて目を覚ました。辺りを見回すけれど、いつも私をはさんで寝ているお父さんとお母さんはいない。ふすまを少しズラすと、居間のライトの光がまぶしいくらいに差し込んだ。

目を細めてその間からのぞくと、お父さんとお母さんが向かい合って座っていて、お父さんはご飯を食べていた。

何を喋しゃべっているんだろう。

トイレに行く気なんてすっかり無くなって、私はぴったりとふすまに耳をくっつけた。

「ねえ、春ちゃんも冬休みだし、昨日もどこにも連れて行ってあげられなかったから、明後日にでもどこか行きましょうよ」

「あいつは冬休みでも、俺は違う」

お箸が乱暴に置かれた音がした。

「お父さん……」

「誰が食費や塾代をかせいでいるかと思ってるんだっ。俺がしなかったら誰が仕事するんだっ」



今度はイスをひく音がしてドシドシと歩いてく音がひびく。バシンとドアが閉められた音が続いて、お母さんのため息と重なった。聞かなきゃよかった。

ゆっくりと布団にもぐり込んで目を強くつむる。
くやしー。

悲しくなんてない。分かってたことだ。

分かってたことなんだ。

そう思っても、涙と鼻水はあふれてきて止められない。

布団を噛かんで声をおさえる。

枕がグシャグシャにぬれた。

私なんて、拾わなきゃ良かったじゃないか。いらぬなら、もう一度公園に捨ててくれれば良いじゃないか。きっと、猿の方がお父さんより何万倍も優しい。

本当に、猿に生まれれば良かったんだ!!

こんこん、という音で、次に目が覚めた時、辺りはまだ真っ暗で、お母さんが隣に寝ていた。お父さんが寝ていないことにほっとしていると、また、こんこん、という音が窓の方から聞こえた。眠い目をこすって、真っ暗な窓を目をこらして見てびっくりした。

茶色くてでっかい猿が窓をたたいていたのだ。

私がびっくりして動けないでいると、開けて欲しい、というように猿が頭を下げたように見えた。どうやら礼儀正しい猿らしい。

私はおそろおそろ力ギを外して、慎重に窓を開けた。

「ああ、やっと喋れそうな相手を見つけた」

オスの猿のようで、私の二倍はある猿は低い声でそう言った。

「何を……?」

私が不審そうな目でそう聞くと、猿は慌あわてた様子でぶんぶん両手を振った。



「けっしてあやしいもんじゃないっ！ 私はただ、娘を探しているんだ！
動物園に保護された時、森に置いて来てしまったね。やっと動物園から抜け
出せたから探しているんだ。何か知らないかい？ 娘のこと…」
「さあ……？」

まだ不審そうにしている私を見て、猿のお父さんはしょんぼりと肩を落と
した。

「そうかい……ありがとう……」

そう言ってトボトボ歩いて行く大きな茶色のかたまりに思わず、

「私も行くー！」

ベランダにとび出した。

「え、いいのかい？」

「どうせ起きちゃったんだもん。探すの、手伝ってあげる」

すぐに帰ってくればお母さん達もきっと気づかない。夜のうちに帰ってく
れば良いんだ。

猿さんは本当にうれしそうにニコニコ笑って、顔中がしわくちやになっ
た。

「そうかい、じゃあ、行くうか」

「え、まって、どうやって？」

今更気がついたけれど、「ここはマンションの8階。ベランダに階段なんて
勿論ない。
もちろん

「どうやってだよ」

そう言った次の瞬間、猿さんは目の前から消えた。

「え!？」

慌てて手すりに駆け寄って下をのぞくと、猿さんはマンションのパイプを
するすると下りて行って、ひょいひょいと近くの電柱にとびのったところ
だった。

「早くおいでー、もうすぐお月さんが沈んじまうよ」

猿さんはニコニコ笑いながら、おいでおいでと手招きしてくる。それを見
ていると、なんだか私にも行ける気がして、柵から少し身をのり出してパイ
プをつかんだ。



一度パイプにしがみつくと、上り棒みたいで意外とスルスル下りられた。そのまま猿さんみたいにひょいっと跳ぶと、信じられないくらい高く跳べた。

「上手い上手いっ。お前さんも猿じゃないのかい？」

猿さんの隣の電柱にとびのった私を見て、猿さんは手をたたいて笑った。

「それじゃあ、行こうか」

笑い終わると猿さんは電線に両手でぶらさがって移動し始めた。電柱から電柱へ。まるで木から木のように。

「私にもできる？」

「できるさ。さっきのもできたろう？」

さっきみたいに、猿さんが簡単だよと笑うから、私もできる気がして電線をつかんだ。

いつも歩いている道を今夜は上から見てる。こうしてみると電柱はどこにでもあって、どこにでも行ける気がした。

「娘さんとはどこではぐれたの？」

「ちゅうどあの森の辺りさ」

猿さんが指さした先にはあの、いつもお父さんが私を拾ったという公園があった。

「行ってみよう。たしかこの道の先で曲がればあの公園まで電柱が沢山あるよ」

「おおっそうかそうか。ありがとうよ」

猿さんが探している娘さんが、本当は私かもしれない、なんて言えなかった。

公園に着いて、しばらく私と猿さんは娘さんの名前を呼びながら移動した。娘さんの名前もハルで、ますます私みたいだった。公園の一番端の木からその反対側の端っこの木まで。高い木から、低い木まで。

全部の木を見て回ったけれど、ハルちゃんはどこにもいなかった。途中で中、休憩もした。私は猿さんからノミトリの方法を教わった。猿さんの大きな背中から小さなノミをほいほい取ると、本当に猿みたいだとまた褒められた。



まだいるかもしれない、見てない場所があるかもしれない。もう一周。また休憩。もう一周、また休憩。

もうこの公園にはいないだろうとは言えなかった。猿さんの顔色はどんどん悪くなっていくけれど、猿さんは止めようなんて言わなかった。

それを見ていて、思い出した。

私がまだ幼稚園生の時。家族でキャンプに行った。お父さんとお母さんを驚かそうと思って私は茂みに隠れた。そうしたら、すぐにお父さんの私の名前を呼ぶ声が聞こえて、必死に私を探すお父さんが茂みのすき間から見えた。見つかった時はものすごく怒られて、キャンプ中、私はずっと泣いていた。

あの時の、今にも倒れてしまいそうな顔とおんなじだ。今にも泣いてしまいそうな顔とそっくりだ。

結局、私と猿さんは森を四周した。結局見つからなかった。一番初めの目印の木に戻って来た時、猿さんはこっちを振り返った。

「もう、君といっしょにいようかな……。まるで君が私の娘みたいだ。君も人間より猿っぽいし……」

「ダメだよ」

暗い顔でそう言った猿さんの言葉をさえぎった。

「ダメだよ。私は春だけど、ハルじゃないもん。電線のつかまり方だって、ノミトリだって、私より、きっとハルちゃんの方が上手いよ」

だから、がんばって。そう続けると、最初みたいに猿さんの顔がクシャッとなった。

「そうだね、きっと、そうだろうな」

猿さんがそう言ったのと、私が木の枝から手をすべらせたのは同時だった。

やっぱり、私は猿じゃなかったみたいだ。

朝。いつも通り布団の上で、いつも通り目が覚めた。いつも通り三人でご飯を食べて、いつも通り登校する。いつも通り家に帰って来て、いつも通りマイルールを実行した。

「あら、今日は服もハンガーにかけるし手も洗うのね」



賢治のまちから 高校生☆電話大賞

お母さんはびっくりした顔で私を見る。

「まあね。ちよっと変えたの。クツもそろえて脱ぐし、服もかけるし手も洗う。全部カンペキに出来たら良い日なの」

「あら、いつのまにかお姉さんになっちゃって。これでランドセルも投げなくなれば大人なの」

「それは別」

そう言っただけで布団にダイブしようとする、お父さんが布団の上に倒れていた。

「お父さんね、最近がんばり過ぎだからお休みもらって来たの。それで今日、みんなどこか行こうって言ってただけだね……」

体中が痛くてだるくて動けないんですって、と、お母さんがちよっと楽しそうな困った顔をする。お父さんはちよっとうなって、お帰り、と言ってから動かなくなってしまった。

「私、湿布貼ってあげようか」

そう言っただけで、また、お母さんがびっくりした顔をする。

「あら、随分気がきくのね。昨日の今日で、何かあったの?」

今度は不思議そうな顔をするお母さんに、私は湿布を取りに行きながら笑う。

「そう、昨日ね、猿さんに教えてもらったの。電線つたって移動もできるし、ノミトリだって上手いんだから!」

ノミトリより、湿布を貼る方がだんぜん簡単そうだと言っただけで、お父さんもお母さんも笑っていた。

数週間後、動物園にあの脱走した猿が子供を連れて帰って来たというニュースは、私の人生で一番のビッグニュースだった。